

《翻 訳》

William Blake : The Poems by Nicholas Marsh

宮 町 誠 一

第6章¹

ブレイク研究の類型

一般的解説

ウィリアム・ブレイクは、19世紀末の数十年の間に徐々に研究者の関心を獲得していった。それはブレイクの伝記作家アレクザンダー・ギルクレスト²と詩集の編集者エリスとイェーツ³の功績によるところが大きかった。その一方で、ブレイク研究にとっての最初の主要な研究業績はアルジャーノン・チャールズ・スインバーンによって1868年に出版された長編の論説集であった⁴。ブレイクの名声は20世紀の前半を通してその評価を高め続け、研究者の関心をますます集めるようになった。しかしながら、20世紀の初頭におけるブレイク研究にとって最も意義深い貢献は、ジョン・サン普森博士（1905）⁵、サー・ジョフリー・ケインズ（1925）⁶、スロスとワリス（1926）⁷によるそれぞれの編集作業であった。加えて、『ブレイクの「ヨブ記」のヴィジョン』（1910）⁸ではジョセフ・ウィックステードによるデザイン解釈が関心を深め、モナ・ウィルソンによる伝記（『ウィリアム・ブレイクの生涯』、1927）⁹は長きに渡ってブレイクの生涯に関する標準的な解説書となっていた。

S. フォスター・ディモンの『ウィリアム・ブレイクー彼の哲学と象徴』（1924）¹⁰は、全体的な研究の理解にとって最も意欲的な初期の業績の一つであった。それ以来、20世紀の中葉から現代に至るまでブレイク研究の業績は、加速度的に真剣さを増していった。高揚する議論に対する重要な業績は、ノースロップ・フライ、デイビッド・V・アードマン、S・フォスター・ディモン、ジェイコブ・プロノスキー、ハロルド・ブルーム¹¹、そして他の多くの研究者によってもたらされた。近年においてもブレイクは熱心な研究対象となっている。マルクス主義者、文化物質主義者、構造主義者と後期構造主義者、脱構造主義者、精神分析医、そしてフェミニストたち

すべてが、ブレイクの作品から有用な鉱石を掘り起こしている。その研究の歴史において、合意に至ることはほとんど無に等しいにも拘らず、活発な議論が継続しているのがブレイク研究の特徴的一面である。

本章がブレイク研究全体を俯瞰していると言うつもりはない。ここでは異なる目的があり、「今後の研究資料」¹²における提案を活用することで、整った図書館で自ら探求を続ける際に、有益と思われるいくつかの議論を単に開始することがその目的である。批評家の考えに接する際には読者は、常に自立的に考えるべきである。勿論、批評家の見解に同意する義務を負わされているわけではない。読者の精神は、教師や、講演者から、あるいは講義の中で、テキストをめぐる議論を通して刺激を受けることも可能である。批評家にも同様に対応することが求められる。批評家たちの研究書や研究論文を読んだり、読者自身の見解や彼らの見解を疑ってみることで、ブレイクに関する議論が刺激的なものとなる。ここでは7つの重要な見解を検討する。それらはお互いに異なった立場を表明している故に選ばれており、この7つの見解は相互に他の見解に対して異議を唱えているのである。

ノースロップ・フライとディビッド・V・アードマン

5つの見解をより詳細に検討するに先立って、20世紀中葉から多大な影響を与えた2人の批評家を手短に見ておこう。ノースロップ・フライ著の『恐ろしい均衡-ウィリアム・ブレイクの研究』（プリンストン大学出版会、1947）¹³は、膨大な折衷主義的な解釈からなる業績の中で、神秘主義的、宗教的、象徴的な類推を通して広範囲にわたっている。『恐ろしい均衡』の執筆に際して「ブレイクの芸術観において示唆されているより広範囲の批評理論に」巻き込まれていったとフライ自ら認めている。そして、その冒頭の章で彼は、ブレイク的な審美観を構築することから始めている。フライによると「芸術家は、自分の認識を創造へと、自分の視覚をヴィジョンへと反転させるために苦悩する人間であり、芸術それ自体はより高次の現実を…実現する技巧である」。フライは次のような言葉でヴィジョンと呼ばれているものと対峙している。

ブレイクが太陽の周りに集っていると言う天使の一团は、「そこには」存在しないとブレイクに言っても意味が無いことである。どこにいないというのか？多分、虚無の9,000万マイル彼方にあるガス状の溶鉱炉には存在しないのだろう…。自分が天使たちを見たことを証明するには、ブレイクは天を指差すのではなく、例えば『ヨブ記』の連作の第14番目の銅版画を示すだろう、その中のテキストは「朝の星はともに歌声をあげ、神のすべての息子たちが歓喜のあまり叫んでいた」と述べている。それは天使たちが現れている場所であり、ブレイクの想像力によって形成され、創造された世界であり、その作品を見た者すべてが参入できる世界なのである。

フライはこのように3つの世界、「ヴィジョン」と「視覚」と「記憶」の世界を演繹的に導き出している。そして「ヴィジョン」の世界とは、「充足された欲望と際限のない自由」を目にする世界であると指摘してその議論を深めている。幼少期には物事のある状態を想像すると、それは「実現する」、あるいは「実現するのが可能である」と思っている。ヴィジョンを視る者は自らが想像する事象は「そうなるべき」であるという原則を捨てることは決してないし、その期待を抑えるように忠告する良識ある現実的な助言を受け入れることは断じてない。「想像力は現実を創造し、欲望は想像力の一部であるのだから、渴望する世界は受動的に受け入れている世界よりも現実的なのである」という主張へとフライは論理を展開している（上記の引用はすべてフライの著作、26～7ページからである）。

ブレイクの韻文に見られるように、「ヴィジョン」は、日常的な五感で認知している単調で抑圧された世界より「現実的である」という理念は、魅力的なものである。フライが構築している議論は、より高次の「現実」に対して理性に基づいた裏付けを付与するものではないが（必然的に、この種の主張はすべて「現実」の捉え方の問題である）、ブレイクに対する彼を夢中にさせる関心は審美的な論点であることは確認出来る。つまり、「ヴィジョン」と「想像力」というテーマであり、ブレイクの象徴を創造力に富み、予言的な過程とその目的に関する解説として解釈しているのである。

その研究のまとめに当たって、フライはブレイク自らが創造した「システム」と広範囲にわたるテキスト、伝統、神話、時代とのあいだに幾つかの類似点を導き出し、神、つまり「人間の想像力」から直接派生した「詩的才能」によって生み出された独創的な想像力と言語というブレイクの概念を執拗に解説している。すべては根源的には一つの言語であり、一つの宗教なのである（K579）。ブレイクの象徴は実際のところ「原型」¹⁴的である、つまり、西洋の歴史を通じて深いところに根ざしており、心の奥底に語りかける象徴と神話という伝統から抽出されているという意味で「原型」的なのである。ブレイクの象徴の体系がいつも変わらず関連性があり、関心を喚起し続けているのがまさにこの特質なのである。この「原型」、従って、想像力に富んだヴィジョンの時間を超えた特質に対するフライの関心は自明の理である。

ブレイクを含むすべての詩人は、その生きた時代との関係性においてまず研究されなければならない。しかしこの種の研究の価値が十全に評価され、「アナクロニズム」という概念が無意味とされる時点に至る。研究の対象とすべき詩人とは、時間と空間というその詩人のコンテクストを超越して伝える能力のある詩人のことである。従って、我々はその詩人の意味の現在における管理者であり、その訴えの深遠さの程度は我々自身の見方次第なのである。

（フライ、420ページ）

ブレイクの研究から、「想像力に富んだ図像体系」のようなものが存在し、テキストとしての

ブレイクの明らかな難解さは、ブレイクは他の作家よりも過度に「作品を読む際に、その文法の多くを学ぶように」強いている点にあると、フライは推論している。そこで、異なる多様なテキストに通底している共通項があり、時間と空間には関係なく、すべてが共有しているものが有り、ブレイクの神秘的システムはこの通底している「想像力に富んだ画像体系」を並外れた明白な様式と深遠な様式で提示していると、フライは提案している。

ディビッド・V・アードマンの『ブレイク—帝国に抗う預言者』（プリンストン大学出版会、1954）¹⁵はフライと双璧をなす一種の補填的な業績として捉えることが可能である。彼はフライの文学的、神秘主義的研究に異議を唱えるというよりは、その種の研究になんの関心も示していない。アードマンは別の、彼自身の同様に詳細にわたる学問的な視点を追い求めている。アードマンの著作はブレイクの生きた時代に関する政治的、社会的、歴史的状況と出来事に関する詳細な研究で成り立っており、ブレイクの作品に関する彼の解釈は、ともかく、テキストとその時代の政治との関連性を探し求めている。この点は「歓喜の日」として一般的に知られている銅版画に関するアードマンの注解に具体的に示されている。

ギルクリストは夜明けを擬人化して見ている。若さを謳歌している若者であり、1800年頃にその絵の下にブレイクが彫刻した詩行を無視している。

アルビオンは奴隷とともに働いた工場から立ち上がった、
永遠の死の舞いを踊った州の為に自らを犠牲にして。

この挿入詩句の象徴的意味合いは、これは『アメリカ』の象徴より、後のものであるが、その作品において独立宣言をまとめたブレイク自身の言葉から生まれている。ここではアルビオンは地名以上の存在なのである。彼は『4つのゾア』の「アルビオン、古の人」なのであり、つまり、永遠の英国人であり、より広くは、英国国民なのである。1780年にイングランドの国民は独立の示威行動で蜂起し、国々（『アメリカ』におけるブレイクという言葉で、植民地の州を意味していた）を救う為に反乱（黙示録的自己犠牲）のダンスを踊っていた。

（アードマン、10ページ）

アードマンは続けてゴードン暴動を詳しく解説し、英国が1780年から82年にかけていかに革命の瀬戸際に立たされていたかを詳細に解説し、当時の英国に存在していた、アメリカの独立戦争に対する反発の根深さを示す背景となる情報を提供している。

この著作を通じてアードマンは同じような議論の形式を採用している。彼は注解の中で自らの解釈を試みる際に、ブレイクの作品の製作時期における直接的に関連のある政治的環境に注目し

ている。例えば、ブレイクが長大な詩、『ジェルサレム』の執筆を終えようとしていた時期に、その詩の最終部で自由の先駆者としての「アーリン」¹⁶の興味深い登場を、当時、アイルランドの解放の成功を期待して、実に多くの改革者や急進派の人々が、ダニエル・オコネル¹⁷による新しいアイルランド独立運動に注目していたことを指摘して、その背景を詳説している（アードマン、481～484ページ）。また、『ジェルサレム』の図版39における「バースの声」の注解では、バースにある聖ジェームズ教区の司祭、リチャード・ワーナー¹⁸が1804年と1808年に反戦の説教を出版し、その時期を通じて平和と改革を求める著名な活動家であったことを指摘している（アードマン、475～478ページを参照）。

つまり、アードマンの著作は文学的研究と歴史的研究を統合した偉大な業績である。彼の関心はフライを補完していることになる。後者はブレイクの審美意識と想像力の物語を探求し、その一方で、アードマンは社会的、政治的ブレイクを追求している。

第1部ではブレイクの象徴は複数のコンテキストに同時に適応できるという特質に注目してきた。例えば、「オークの循環」は感情と精神の個人的な物語として語ることもできるし、社会的な進化に関する歴史的物語として語ることもできる。従って、ブレイク研究の多様性に驚く必要はないだろう。その差異はテキスト上の問題というよりは、批評家の視点の相違を明らかにしている。このようにブレイクの著作はテキストが変容する作品群なのである。つまり、ブレイクの著作は個々の批評家の特定の視点に答えて、それなりの成果を芳醇に生み出すことを可能にしている。

これから取り扱う5人の研究者の見解は、それゆえに非常に異なるブレイクに関する見解となるが、それぞれが同様に正当性を担保している。テキスト、それ自体が多くの異なる方向に光を放っていると捉えることができる。その光が照らし出す3つの方向性として、初期の伝統的批評家、脱構造主義的な見解とネオ・フェミニスト的なアプローチを取り上げている。それから、2つの最近の議論、両者ともブレイクの時代の文化的コンテキストに彼を関連づけているが、異なる手法で研究しているものを検討しておきたい。

ジョン・ミドルトン・マレー

最初の批評家はジョン・ミドルトン・マレーである。彼の著作『ウィリアム・ブレイク』¹⁹は1933年に出版され、その宣言された目的は「ただ、ウィリアム・ブレイクの原理、つまり、ブレイクが最終的に命名した「永遠の福音」を発見し、可能な限り解明することである」²⁰。ここでは、彼の解釈の冒頭部と最終部をある程度詳細に検討しておこう。

マレーの研究書の第1章は「精神的な感覚」と命名されている。当時、『月の中の島』と呼ばれている幻滅と風刺であふれた原稿の執筆最中に、ブレイクが『無垢の歌』の美しい詩集の一編を突如書いていると指摘している。マレーはそこに「ヴィジョン」、あるいは啓示の瞬間があっ

たと推論し、第1章でこの体験を解きほぐしつつ議論を進めている。「それは『無垢の歌』の始まりであり、精神的な感覚という落ち着いた沈黙の渦巻きの中で、その詩集が生まれて」(マリー、13ページ) いるので、彼はその体験を非常に重要なものと見なしている。続いて、彼は『自然宗教は存在しない』の最初の命題:人間の知覚は知覚の器官によって制限されない。彼は、感覚(どんなに鋭くとも)が発見できる以上のものを知覚する」(K97)を引用している。感覚器官を超えた感覚の認識がブレイクにとって根本的なものであり、ブレイクの理解にとって土台となるものであると述べている。そうして、精神的な体験は本質的に2重構造であると指摘することで本格的な議論を開始している。何故なら、精神的な体験は「外なる世界」、肉体的な感覚で見る日常的な世界は突然「明らかに」なる世界と「内なる世界」の両者の存在をはっきりさせてくれるのである。「主観的に、人間もまた明らかになる世界と、見るものは同じように浄化されるのである。両者は新しい媒体へと変容する、つまり、ブレイクが述べているように、想像力の媒体となるのである(マリー、14～15ページ)。

人間は日々の生活をこなすために周囲の物理的な事物を見なければならぬが、その世界を唯一の存在と見てはならない。従って、想像的に見ることは普通の見方を放棄することである。「物事があるがままに見ることは自己の隷属化を要求し、強制する(マレー、15ページ)。その要請の元では、人間は受動的で、完全に解放的で、受容する存在となってしまう。しかしながら、表向きの受動性は「人間の内なる他者」に高度の能動性を許容することになる。ブレイクはその状態を次のように説明している。「それ故に、神のように人間がなるために、人間のように神がなるのである」(K98)。この精神的な変容は正統派のキリスト教徒にとっては歴史的出来事であった。キリストを通してそれが起こったのであった。一方、ブレイクはこの幻視的、精神的瞬間は繰り返し反復される体験であり、常に浄化し、再生の体験に違いないと語っている。マリーは以下のように説明している。

…(神は)人間を捕らえ、人間自身から解放し、人間は神になる。自我の内にある人間ではないのである。何故なら自我から解放されたのだから。自我の内にあることは決してない。人間の自我は神への障壁であり、障害物なのであり、本来の人間になるために神が取り除いているのである。

(マリー、17ページ)

この体験の後では、普通の見方に戻った時、別人となっている。その体験が人間を変えてしまったのだ。しかし、この幻視的瞬間に終わりはない。そしてブレイクはマリーが命名した「精神的感覚」の体験を求め続けることを勧めている。「神は人間を自我から完全に解放できるし、解放している。人間自身が神にそう切望するように命じているのである」(マリー、17ページ)。

第2章と第3章で、マリーは2つの原理的なテキスト、『自然宗教は存在しない』と『すべて

の宗教は一つである』に着目して、これらのテキストを通して、ブレイクは彼自身の幻視的体験の内容を世界に提供しようとしているとして、その中の命題を検討している。ブレイクはヴィジョンの「真実性」を主張するにとどまらず、普通の物理的な見方に固執する者は、自分自身を超えた存在を知覚できない（「割合のみを見る者は自分自身しか見ていない」）、と述べている点をマリーは特に指摘している。その理由は、そのような人間はすべてを自分自身の感覚を通して認知し、自分との関係で見ているので、従って他者を体験することが皆無となってしまうためである。対照的に、「物事の永遠の個性が認知されると、自我は停止状態に陥る。物事の「無限性」は人間の「無限性」と一体となる（マリー、23ページ）。このような洞察からマリーは2つの関連する理念を開拓することができる。まず、最初に、想像力溢れる視点は、すべての物事の個性を認知できるようになることであり、ブレイクの言葉である「詩的天才」と同一視している見方である。次に、ブレイクは「2つの自我」の原理を発展させ、詳しく述べていたのであった。結局のところ、「意志」に先立つ何か人間には存在するのである。

…意志が生まれる自我よりも深遠な存在がある。ブレイクが表現しようとしていたものは…すべての人間にはより深遠な人間が存在し、その存在は意志による行為と、思想と理性による言葉によって否定されている。この意志と理性は否定的存在である再生されていない自我が生まれ、その自我を形成している。人間の本当の潜在能力は、この積極的でより深遠な自我の内に存在し、ブレイクが以前に「詩的天才あるいは真の人間」と呼んでいたものである。

(すべてはマリーからの引用、32ページ)

マリーはこのように一つの啓示、ブレイクを造り変えた「想像力溢れる見方」の瞬間に焦点を合わせてこの著作を始めている。そうして、ブレイクの1780年代後期の作品について解説しながら、「想像力」の意味を分析し、検討している。それからマリーは、これはブレイクの根源的な本質であり、すべての後の著作、多様でありかつ複雑なヴィジョン、ブレイクの生涯で記録されている落胆や体験は、直接的にそして論理的に、彼の人生の初期の段階で辿り着いた、突発的にブレイクが覚醒したこの理解と関連していると述べている。マリーの著作の他の章では従って、洞察を深めるというよりは、解説に終始している。ブレイクの原理に関する他のあらゆることは必然的に「想像力溢れる見方」の啓示に沿ったものとなっているからである。

実際にはブレイクには語るべきものは他にない。本質的には彼の作品はこの同じヴィジョンの反復でしかない。しかし、このヴィジョンは献身的態度を必要とする。このヴィジョンは人生そのものなので、それを生きてゆかねばならない、それ故に失敗することもあるが、決して忘れられることはなかった…このヴィジョンの破壊と再生は、ブレイクの死をもって最期を迎えるのである。

(マリー、35～36ページ)

マリーは確かに「想像力」とそこから派生する課題を、ブレイクの他の作品に関しても彼なりの分析を続けている。その過程で、彼は『天国と地獄の結婚』、『永遠の福音』、『ミルトン』に特別な関心を寄せている。それはブレイクの思想の一貫性に関する解説としては参考になり、明晰な解釈と言える。この詩人の独特な洞察の一つ一つが、必然的に彼の大きなヴィジョンの一部となっている点が強調整され、ブレイクの詩がうまくできている際には、彼の理念が容易に理解できるようになっている。「二つの自我」の原理が、後期の預言書の中で探求されている神秘的な状態へと進化していく過程、特に『ミルトン』では「自我」、「スペクター」、あるいは「私のサタン」へと進化していく過程をマリーは明らかにしている。そして、ミルトンがその根源的体験の中で、「自我の解放」と描写している体験から生まれる「自我滅却」の原理を検証している。「自我滅却」には他の概念もまた含まれている。「その長さと価値において6000年に匹敵する」(K516) 時間における「永遠の」瞬間の重要性と、別の一章を設けている救済の概念である。

マリーの中心的テーマは次の2点である。まず、ブレイクの詩に関する根本的な真理はヴィジョンと想像力が関係していること、なぜならブレイクの他の様々な象徴や原理はそこから生まれているのだから。二つ目はブレイクの原理の最終的な姿は幻視的洞察に基づいた、抗いがたい「永遠の福音」であることである。

マリーの研究書はノースロップ・フライの折衷主義の学識横溢する内容と比較すると、彼はブレイクの著作自体に焦点を合わせ、テキストを読者に解説することに努力を傾注し、ブレイクの言葉の意味内容を手掛かりとして、文学的、神秘主義的な歴史から拾った類似点を巡る旅に陥ることなく、彼自身の議論を進めているという点において、「伝統的」なものである。マリーは説得力のある、明晰な著述者であり、関心を持ったブレイクの思想の領域を明確に、そして分かり易くしたという点で、大きな成果を収めたと言える。それ故に、ブレイクの研究では実に多く見られることだが、特に、折衷主義的な研究業績とは対照的に、彼の著作は有用な研究成果として評価され続けている。

ネルソン・ヒルトン

2番目の批評家はミドルトン・マリーとは非常に異なるアプローチをとっている。ネルソン・ヒルトンの論文、「存在の鎖に繋がれたブレイク」²¹は1980年に出版され、ブレイクの詩の作品における「鎖」と他の鍛冶屋のイメージと関連するイメージを探求するために、テキストの解体や意味の骨格解体と合わせて、意味の担い手としての「言葉に」焦点を当てた手法を用いている。ここでは「ロンドン」に関するヒルトンの注解をある程度詳細に扱うことになる。その理由は、本書の第3章でこの詩を扱っており、また、ヒルトンのテキストに対する集中的なアプローチは、「脱構築」と呼ばれている分析手法であるが、その分析の全体像を明らかにする必要があるからである。ヒルトンは彼の冒頭で自らのテーマを述べている。

「心が作った鎖」の音が聞こえる詩人にとって、我々の惑星、地球が誰かにその重い鎖を断ち切って欲しいと哀願する姿を描写する詩人にとって、そのような道具は物質的な意味内容以上の意味を持っている。それらは、ブレイクが直線的で、一義的な発話と融通性のない思考プロセスを、彼の4重のヴィジョンで置き換えようと苦闘している際の鍵となる、鎖の輪としてその姿を提示している。一つの鎖は単なる鎖ではなく、それが言及している物の一例であり、(単語として)それ自身が参加している物の一例であり、「存在の偉大な鎖」として様々に具現化されている秩序のイメージであり、その言葉の「輪」によってその言い換えである一連の談話なのである。

(ヒルトン, 71ページ)

ヒルトンは「存在の偉大な鎖」について簡潔な議論をまとめ、ポーブを引用し、彼がその世紀におけるそのイメージの意味内容を定めたと述べ、言語に関してヒューム、ベーコン、ロックの見解について長めの議論を展開している。ロックの『人間の理解に関する論考』²²では能記(単語)と所記(物)の間の関係は恣意的なものであることを認知していたが、言語が2つの「正確で、決定的である」「不変の関係性」を与えており、「それは非常に必要なことである」と結論付けていたことを指摘している。従って、ヒルトンは「連想と言語の鎖における繋がり輪は、このように恣意的で独裁的な権力の道具である」(ヒルトン, 74ページ)と結論をまとめ、ブレイクにとっては呪詛の対象であるが、この「心理言語学的な」権力を18世紀の政治学と哲学に関連づけている。

「鎖」のイメージと言語の関連性を強調して、ヒルトンはロックの「鎖」を覆すブレイクの詩の使い方は、問題を孕む疑問を提示していると述べている。つまり、「鎖」を批判する者が「鎖」に繋がれていないと知ることができるのだろうか?そして、「心の中で締め付ける」「鎖」の本質は何であろうか?(ヒルトン, 75ページ)

作品「ロンドン」に戻って、ヒルトンはこの詩がその言語の中でこれらの疑問を生み出している姿を示している、としている。第1連で繰り返されている‘charterd’に注目し、特許状を疲弊した住民に対する強権的な「恣意的な強制」、換言すると、言語によって生み出された権力を表す「文書」と見なしている。ヒルトンは他の詩行を単語と物との関係に対して根源的な疑問を呈して、分析を進めている。特に、その詩における五感の乖離と、音声の連想の使用がその素材となっている。彼の議論は以下のように要約できる。

[第2連の最終行, ‘The mind-forg’d manacles I hear’] は単なる政治的抑圧の示唆を超えて、我々の経験とそれへの反応の構造について疑問を投げかけている。「私には聞こえる」は、「あなたには聞こえているのか?」と暗に問いかけている。…何が聞こえてくるのだろうか? 「偽造されたものなのか、あるいは詐欺の手段なのか?」私の物なのか、心なのか? 鎖

に繋がれた人間？それが何であれ、それは至る所で、聞こえるものと見えるものである棺の中で掘り出され作られている。ロンドンというこの巣窟の中で、読者を解放するブレイクの戦略は意味の多極化であり、声の繋がりをその一番弱いつなぎ目で、つまり単一の音声の語のところで断ち切ることである。この脱構築には目と耳による異なる衝動の美による論理の新たな方向付けが関わってくる。このように血を流している兵士のうめき声を聞くように促され、その一方で煙突掃除の少年たちの悲鳴が、聖ポール寺院を棺を覆う布で覆っている。

(ヒルトン、76ページ)

ヒルトンは第3連を引用し、各詩行の最初の文字を強調し、‘H..E..A..R’, ブレイクが恰も「耳で読むよう」に勧めていることを示しているとしている。そうして最終連へと進めている。

聞こえてくるのは第2行目の最後に来ている「呪い」ではなく、3行目の最後に来ている「涙」を吹き飛ばしている様であり、‘hear’と韻を踏んでいる。これらの単語、hear-curse-tearは、読者がそれらを見聞きして最後に‘hearse’という言葉に収斂される時、目に見える状態と音声との矛盾を際立たせている。‘marriage hearse’という撞着語法的な²³イメージは視覚的イメージと音声、能記と所記が永遠に「結婚の鎖」(E & S 352)で繋がっており、結婚生活に縛られていることを想像することの不可能性を指し示している。

(ヒルトン、76～7ページ)

ヒルトンは「ロンドン」の言語学的な特徴に関する同じ様な洞察は、他の研究者、特にガヴィン・エドワーズやハロルド・ブルーム²⁴によってまとめられていることを認めているが、ブルームの結論、つまり、この詩における言葉の脱構築は、旧約聖書の預言者の声と同様に、過去の失われた預言者の声に対する郷愁を喚起しているという結論には異議を唱えている。逆に、ヒルトンは次に述べる様に、肯定的な観点からこの詩「ロンドン」を捉えている。

…肯定的で自ら脱構築するテキストとは、読者に暗に自分の目をその特権化された詩行をさまよい歩かせ、その印に印をつけ、その「すべての声」に耳を傾ける様に促しているテキストのことである。この様な誘いは、すでに言及した論理における矛盾や反復の手法で伝達されている。読者は‘charter’d … charter’d’, ‘mark…Marks…marks’や、5行の中で6回繰り返される‘every’と出会うと、これらの言葉の意味や、意味を形成する方法について疑問を抱かざるを得ないのである。これらの疑問とそれから幾つかの回答が明らかになるにつれて、喜びが「心が作った鎖」を解明し、緩めてくれる。その詩における自らの手による鎖からの解放は、もちろん喜びを感じている読者を完全な自由の領域へと導くものではない…。この詩「ロンドン」の「解放された」理解とは、単なる連想の鎖からのものと特徴づけるこ

とができるかもしれない。しかし、そのような「鎖」はものは限定的で、奴隷扱いし、「貪る」ものではない。

(ヒルトン, 77～8ページ)

「ロンドン」という一つの詩のヒルトンによる分析を詳細に辿ってきた。明らかに、言語に対して集中的に焦点を合わせる性質のものであり、テキストを精読するというあらゆる段階を踏まなければ理解が困難な分析手法である。「ロンドン」は「自らを鎖から解放する（自らを脱構築する）詩である」という結論と、従って、その詩はそれ自身が「限定された言語」という恣意的な独裁から精神を解放する積極的な行為であるという示唆は、ブレイクにおける「鎖」のさらなる分析へと繋がっている。ヒルトンはユリズンの‘changes’（変化）（‘chainges’という聴覚上の音合わせに注目）に一定の関心を向け、最終的に以下の点を示唆している。

鎖によって、ブレイクは、人間は自分自身の看守であり、自分の語彙と文化と認知法に囚われていることを理解する機会を与えてくれている。‘chain of events’（一連の出来事）²⁵という変えることのできない厳然性は、人間がそのように命名していることに発しており、‘chain of reasoning’（一連の論理性）における論理はその前提に埋没している人間の存在から派生したものなのである。人間の解放への鍵を見いだすのは、これらの鎖と枷の本質、つまり、現在の認知とその伝達の本質に関する想像力に富んだヴィジョンの中に存在するのである。

(ヒルトン, 89ページ)

カミラ・パグリア

カミラ・パグリアの著作『性的仮面:ネファティティからエミリー・ディケンソンに至る芸術と退廃主義』²⁶は1990年にまず出版された。本論では「限定された性と無限定の性」と命名された彼女の第10章に注目しよう。その前にこの著作の研究範囲と目的を確認しておくことは有益と思われる。

冒頭の章でパグリアは自身の目的を宣言している。社会制度と態度を改めさえすれば性による抑圧は解消すると信じたのは、「フェミニズム」が犯した過ちであったと述べている。これはルソー主義者の過ちであり、1762年のルソーが著した『社会契約』がそうであったように、このフェミニストの見解は楽観的で、人間の本質は溢れる善意であるというロマン主義的な理念であった。そのような根拠のない楽観主義がもたらす結果を、「アメリカにおける人的サービス、刑罰制度、行動主義療法という一般的な倫理」の分野で辿っている。それに反して人間の性に対する姿勢とセクシュアリティの理解は、自然に対する姿勢を明らかにすることによってのみ可能なのである。

「この著作はサドの見解の立場に立っている」とパグリアは意図的に述べて、人間の本質は「暴力と欲望」であることを受け入れることであり、「性は権力であり、アイデンティティーは権力であり」、西欧の文化にあっては「搾取の対象にならない関係は存在しない」のであるから、強姦は自然な行為であるとしている（すべての引用はパグリア、1～2ページ）。

パグリアの議論は広範囲にわたり、彼女の呼ぶところの「西欧文化」の特徴を、その起源をエジプト、続いてギリシャ、ローマの古代の時代に求めながら解説し、従来の一般論的な見方を覆しつつ自らの理論を展開している。自らの見解を立証する中で、彼女はすべての西欧芸術は「枠にはめ」、そして「投影する」一つの形式であり、つまり、それは男性の性的攻撃性と恐怖の表現であると提唱している。芸術は切望の対象である女性を「美」として想像し、定義しており、同時に、女性性という恐れの対象である神秘性に対して「美」と限界（「枠にはめる行為」）を負わせているのである。このように芸術は、「性的な仮面」、少なからず人工的な夢、態度、個性と身体的な姿勢を表現しているのである。そして、この様な「仮面」は混沌とした、暗黒の、神秘的な自然に対する恐怖を支配し、制御する必要がある男性によって生み出されているとしている。つまり、「芸術は自然という悪夢から目覚めるための闘争の様式である」（パグリア、39ページ）。西欧芸術と資本主義がもたらした自由解放の成果に対して、彼女は男性に感謝の念を表明し、「もし文明が女性の手に乗ねられていたなら、未だに草の小屋で生活しているだろう」（パグリア、38ページ）と指摘している。この様な彼女の言葉から明らかな様に、パグリアは「自然」と女性を明確に同一視している。

ブレイクに関しては、パグリアの分析は、彼の作品では性がテーマとなっており、その製作段階でセクシュアリティが表現されているので、その妥当性が論点となることは予測ができる。加えて、セクシュアリティの、特に、攻撃性、権力と欲望、そしてその相関関係にある不安という男性のセクシュアリティの「悲観主義的な」（あるいは現実的な？）分析を見てきているわけである。ブレイクに関する章におけるパグリアの中心的な主張は以下の通りである。

ブレイクの著作はひどい矛盾で引き裂かれている。ブレイクは社会的、宗教的制約から性の自由化を望んでいるが、同時に地下に住まう大いなる母の支配から逃れようとしている。なんと、性と向き合うたびに母なる自然の暗い抱擁へと戻って行くのである。詩人、職人としてのブレイクの疲れを知らない生産性は、自然に思いを馳せる際に男性の想像力が見いだす、堪え難い畏から生まれている。

（パグリア、270ページ）

ブレイクは、性と自然の間のこの葛藤に対する解消策としての男女両性具有性を拒否している点で、ロマン派の詩人の中では特異な存在であった。ブレイクは一つの理想を示し、男性と女性が一体となっている状態を再生しているが、彼の両性具有者は怪物の様相を呈しており、その詩

自体では中心的な対立は男女間のものである対立物の争いを継続している。性の争いが未だ問題となっていない『無垢の歌』でも、「煙突掃除の少年」や「小さな黒人少年」の中で搾取する人物や他人を操るような男性の権威主義的人物に関するサディズム²⁷や、人間を搾取する社会の有様を見てきた。「聖木曜日」の中で役人の僧侶が子供達を聖ポール寺院に導いている杖は、「雪のように白い杖」は不能の男性性器の象徴であることを指摘し、白色の意味を無垢を喪失した色彩として敷衍し、この色を男女が白粉をかけたカツラをつけていた18世紀の習慣と関連づけている。

パグリアは「喜びという名の幼児」の詩に特別な関心を向けている。この詩において「意識上での幼児期に後退している」と彼女は語っている。「子供が境界を超えて大人になりつつあるルソーの聖なる子供の姿が見てとれる。そこでは何が見えているのだろう。優しさと無垢があらゆる面で脅威に晒されている」(パグリア, 272ページ)。彼女は「喜びという名の幼児」の語り手の姿勢と、新生児を見守っている詮索好きな人になるように奨励され、その結果として読者の心に生み出される複雑性に焦点を合わせている。この詩が思いを巡らすように強いている無垢そのものによって読者は、無意識的にサディスティックな反応へと促されているとパグリアは論じている。この詩の単純さとむき出しの状態、そして子供の未だ言葉を話せない沈黙は、「人と存在の間の緩衝材」を取り除いている…。この詩の自我のない柔らかさが、圧倒的に強烈なケスラー²⁸の感覚を覚醒している、それを無意識に抑えようとはしているが。感覚を鋭敏にすると、それは激しさを増し、ついにはサディズムに行き着く…。「喜びという名の幼児」では呑みつくすような存在が待ち受けている、ブレイク的な虎であり、それは読者自身である。この詩は読者を催眠状態にしてサディズムへと誘導することによって、養育と庇護という価値観を覆し、「煙突掃除の少年」の抑圧的な、偽善的な権威が行うように、「愛のすべての行為は権力の主張である。そこには無私や自己犠牲はなく、あるのは洗練された支配である」(パグリア, 273～4ページ)とパグリアは断定している。

パグリアが分析の対象としている対になっている詩は「病めるバラ」であり、他の研究者と意見が一致して、その花を女性の性器の象徴と見なして、その「真紅の喜びの暗い秘密の床」を、人目を避けた絶対的なセクシュアリティ、つまり自淫行為の象徴と見ている。しかしながら、パグリアはその詩の曖昧性に注目している。男性が追い求め、女性が逃れ、身を隠すという宮廷恋愛の様式が、明らかにこの詩におけるブレイクへの批判対象となっている。そして、詩人は性行為への参加を拒絶している女性の姿勢を明らかに糾弾している。それにも拘わらず、その虫の攻勢、つまり、追及のサイクルが決着する必然の強姦が達成されると、その結果、「お前の命を破壊する」とブレイクは示唆している。一方で、「自然における夜の嵐の中で滅却されるのは女性のアイデンティティーではなく、男性のそれである」と、パグリアは解説している。ブレイクがセクシュアリティの解放を求めて議論するたびに、女性のセクシュアリティの袋小路に陥るのである。『セルの書』はもう一つの同種のテキストであり、その中でブレイクは性的禁欲に対する敵意を露わにしている、つまり、セルの孤立は病んでいる、なぜなら、エネルギーが生まれてく

る対立物間の闘争を拒んでいるという、ブレイクの信念を表明している。(パグリア, 276～9ページ)

パグリアは続いて「精神の旅人」の検討へと進め (K 424～7)、ブレイクが社会的な規制から解放された性に対する単純な思い込みから進化していることを確認し、自然が克服し難い問題を呈しているという認識に到達している。その詩作品は「性的な共食いのサイクルであり、男性と女性の人物が勝利と敗北という妄想に取りつかれたリズムの中で、攻撃と退却を繰り返している」(パグリア, 281ページ)。最初のサイクルは男児が老女に渡されて始まり、その女はその子を岩に縛り付ける。老女はその子の悲鳴と呻き声を糧として若返り、その子は自由の身となり、彼女を犯す。そして、権力と抑圧の力学が交互に継続することになる。

「精神の旅人」は性的な予期せぬ逆転の展開の中で進んでいる。最初はピエタの図像であり、老いた魔女が「血だらけの若さ」を持つ処女となる。「大いなる母」は、その息子である恋人を嘆き悲しみ、押さえつけられ、今度は縛られてしまう。そこで男性は女性の自虐的な弱さに大いに狂喜する。奉仕はサド的なテニスコートで逆転する。「精神の旅人」の中でジェンダーは燃え上がり、消えてゆく。制圧と服従という自然の法則がその詩を必然的に構造化している。

(パグリア, 282ページ)

パグリアは、「精神の旅人」の中に残虐性と交代する制圧のサイクルが収束を迎えるという兆候はないと考え、この詩を過度に哲学的に解釈し、教訓的なメッセージが含まれている研究者に対してすこぶる批判的である。ブレイクはこの詩を最初に戻る形で終えており、終わりのない反復を示している。「精神の旅人」は実のところ彼女の呼ぶところの「円の魔術」であるとパグリアは確信している。つまり、ブレイクは性の闘争と自然の恐怖を終わりのないサイクルとして創造し、その循環は詩の中で反復され、何度も繰り返され、やがて空間に現れて、「自己消滅」している。つまり、彼女はこの詩をブレイクがセクシュアリティという堪え難い問題から自己を救済する行為としてみている。パグリアがその章の冒頭で触れていたように、性の解放への願望と「大いなる母」への恐怖からの解放である。

彼女はこのテーマを追求し、「円の魔術」は結局機能せず、そのためにブレイクの預言書の作品群がますます複雑さを極め、冗長な作品となっていった理由の一つであろうと示唆している。「彼の詩は、あたかも叙事詩的な規模をもってしてもこの問題を最終的に克服できなかったかのように、ますます冗長になっていった。解決できないテーマとは普遍的な女性の力である」(パグリア, 283ページ)。「水晶の小部屋」(K429～30)を検討する際にパグリアは次のように述べている。

…私はブレイクを性の解放を唱える預言者としてではなく、自然の奥義を探求し、肉体における性の過酷な隷属の姿を見た魔術師として評価している。…自然に屈することなしに性

は存在しない。そして自然は女性の領域である。ブレイクの恐ろしい運命は、大半の男性がたじろぐその深遠を凝視し、すべての男性の異端のセクシュアリティに潜む幼児性を目の当たりにすることであった。ブレイクの甚だしい加虐的、被虐的性愛を無視する批評は、彼を検閲にかけてきたことになる。

(パグリア, 287ページ)

しかしながら、パグリアはブレイクの率直な姿勢と揺るがぬ誠実さに対する明らかな敬意と、自らの変わらぬ見解、つまりブレイクは矛盾する目的、性を解放し、猛烈な「大いなる母」からの逃避という目的に引き裂かれていたという見方を組み合わせていた。

ブレイクの中で特定されている性的な葛藤の具体例が、パグリアの本章の他の箇所でも多くみられ、その大半は長編の預言書の中で登場している「スペクター」と「エマネーション」という登場人物との関係において、「性的な仮面」の理念について議論し、第一部で見て来たように、驚くほど現代的な特徴を持つ心理的な物語を語っている。ブレイクの両性具有者への恐怖についてもまた具体的に例証されている。分離した男性性の存在を否定するヴァラの言葉を『ジェルサレム』から引用し「女の影、夏の暑さの中で消え去る者…おお、女から生まれし者／そして女に生まれ、女から教育を受け、女に嘲られし者」(K698)、両性具有者がブレイクにおいてはそのように恐ろしい、脅威を与える人物として提示されるようになった理由を追求している。

ブレイクは「天使たちがジェンダーを変え、完璧な純潔の元で性的な交わりを持つという」ミルトン的な天国観²⁹に反発していたことを示唆している。その理由は性的な肉体は猥褻で劣悪なものであり、肉体の一部を廃棄したり、完全に放棄した次元でのみ幸福は成り立つという理念を拒絶していたからである。ブレイクが、両性具有的存在と膨張し、姿を変えるミルトンの天使たちに対して憎悪を抱いていたのは、それは輪郭の解体であったからである。

彼の詩と絵画の中心的な基準点は、「聖なる人間の姿」であり、特に、男性の姿であり、ブレイクはその姿を女性性からの解放のために苦闘する人間の想像力と同一視している。

(パグリア, 292ページ)

ブレイクは明暗法を嫌い、認めていなかったし、芸術に関する文章の中で繰り返し、「明確な輪郭線」の最重要性を強調している。輪郭やそれがもたらす明確な形なしには「すべては再び混沌に帰する」ので、彼は外形を曖昧にしたり、いかなる不明瞭さを示す絵画に反感を抱いていた。そしてそれはまた剽窃の非難を受ける危険性を孕んでいるからである。つまり、彼自身の芸術家としての明確な存在理由が、「輪郭」なしでは危機的状況に置かれていることになる。このような見解はブレイク自身の不安の強迫観念を明らかにしていると、パグリアは解説している。剽窃者と呼ばれることに対する恐怖感を「影響に対する恐怖感」と呼び、ブレイクは「圧倒的な先駆者」に対して自らを守るために明確な線に拘っていると、パグリアは解説し

ている。「それでは究極の先駆者とは誰なのか？それは偉大な独自性、つまり母なる自然」であるとパグリアは語って、ブレイクの根本的な恐怖はその「母」からは切り離されて自分自身を失うことであると示唆して、ブレイクの不安の全体像を描いている。ブレイクの悪夢は、「相互に崩れてゆく」脅威にさらされている二つの顔は、「母と息子のそれ」である（パグリア、294ページ）。

ブレイクは過去には「気が狂っている」と言われることがしばしばあったが、これは明らかに間違いであった。しかしながら、研究者はこれまで彼の象徴を解釈しようとするあまり、ブレイクの詩に込められた潜在的内容を見逃して、すべてを理解しようとする哲学的な体系に落とし込もうとして来たこと、パグリアは論じている。そうではなく、

…長編の詩作品には批評研究では認識されていない一種のヒステリー、あるいは過剰が存在している。芸術は休息からではなく緊張から生まれるものである。芸術はいつも基本的な体験からの逸脱である。ブレイクの長編作品には結び目、違背、緊張で溢れている…。それらは意志力で統合されている…。安易な希望は持てないが、英雄的な彼の業績、つまり、自然から性を救いとうとする作品群は、西洋の叙事詩的な英雄物語である。

（パグリア、295ページ）

従って、パグリアはブレイクの成功の望みのない、矛盾を孕んだ性に関わるテーマをジェンダー、芸術、そして彼女の著作の全体的なテーマである「西洋文化」にとって根本的なものと見なしている。ブレイクの苦闘は、自然の混沌や、その残虐性にも見られる女性の支配という脅威に抗うものである。男性の手によって女性に関する実に多くの書物が書かれてきた理由は以下の通りである。

…洪水のように押し寄せる出版物は、女性の弱さではなく、女性の強さ、女性の複雑さと奥深さ、女性の恐ろしい程の偏在性ゆえに促進されていた。女性の体内にある秘密の機織り機で、哀れな細胞の一片から織られずに、一つの意識ある存在になって生まれた男性は未だ存在しないのである…。

（パグリア、296ページ）

カミレ・パグリアは、明らかに一つの前提を持ってブレイクと向き合っている。その前提は社会と文化のフェミニストという立場からの分析に加えて、ジェンダー問題とセクシャリティの精神分析という現代の分析手法から派生したものである。また、彼女の著作の副題「ネフェルティティからエミリー・ディキンソンまで」³⁰が示すように、西洋文化という広範にわたる野心的な歴史観を通して、「性的な仮面」という彼女が選択したテーマを追求するという研究姿勢を示している。従って、ブレイクの詩が彼女の広範囲にわたるテーマに適合するように、曲解され、一部「捻じ曲げら

れている」と、読者は感じるかもしれない。私自身の見解では、一部のテキストではそのような兆候は見られると思う。例えば、パグリアの分析の大半は受け入れることができるが、作品「幼子の喜び」に関して、その詩の中で可能な目に見えない世界を探求しているという解釈は非常に興味深いものであると思う。しかし、その詩が自虐趣味への招待状と呼べるとは思えない。

カミレ・パグリアが大きな成功を納めているのは、ブレイクの後期の預言書における苦闘の中で、常に部分的に形成され、葛藤している情緒的な混乱に目を向けさせてくれたことである。つまり、単なる解釈に終始する研究者を酷評し、ブレイクの作品は彼女の（精神的に）言うところの「潜在的な内容」で溢れていることに関心を向けたことは有益である。ブレイクは2つの目的、つまり性と自然に対する目的を調和できなかったというパグリアの理論は説得力があり、そして彼女はその理論の裏付けとして多くの例証を提示している。

ここではとりあえずブレイクのテキストが、ジェンダー問題研究家たちが容赦のない議論を交わす戦場と化していることに注目しておこう。アン・メロー³¹とマルク・カプラン³²のような批評家は「女性的なジェンダーを卑下する文化を共有した」反結婚主義者のブレイクを攻撃しているが、その一方で、他の研究者は「エマネーション」のジェンダー・タイプに関する複雑な議論に取り組み、預言書における登場人物に関する複雑に絡み合っている性に関する物語と、そしてジェンダーに関わる物語を解読しようと試みている。論文「ブレイクとジェンダー研究」の中で、ヘレン・P・ブルーダー³³は30年にわたるブレイクに関するフェミニスト研究に関して、非常に詳細な研究とその概要を提供し、その研究が「ジェンダー・アイデンティティーの社会的な構成に関する関心は、フェミニスト研究者によるブレイクに関して向けられたアナクロニズムではなく、ブレイクと共有する奥深い専門領域であることを示すことを期待している」(135ページ)。ジェンダー問題に対するブレイクの深い洞察力を固く信じているブルーダーは、課題の中でもこの最も悩ましい問題は無視されることがあってはならないという警告を発して、次のように結論付けている。「強いられているジェンダーの状態から個人を解放する」こと、「甘美な性的な衣が/貪り尽くすヨレヨレの布にならない様に」³⁴とはブレイクの最も情熱のこもった野心であり、ジェンダーの分析はいかなるブレイクの解釈者によっても矮小化されてはならない(161ページ)。

これから、より最近の二人の研究者の業績に目を向けよう。二人の研究者はブレイクを歴史化すると呼ばれる研究に関わっている。何故なら、二人ともその出発点としてブレイクの歴史的「瞬間」という文化的な状況からの特定の話題を取り上げて、その光のもとでブレイクの詩を再検討しているのである。

ジェニファー・ディヴィス・マイケル

2006年にジェニファー・ディヴィス・マイケルは『ブレイクとその街』³⁵を出版した。彼女の

冒頭の章に目を向けてみると、そこでは『無垢と経験の歌』における、彼女が「都市の田園」と呼んでいる構成要素を探求している。マイケルの著書の他の章では、ブレイクの長編の預言書が「都市」の詩を展開し、都会（ロンドン/ジェルサレム）がテキストによって具体的に体现されている様を明らかにしている。

マイケルはブレイクの彫版された銅版と窓、つまり都会における認知の枠組の間に類似性を見ている。人々は都市の全体像ではなく、その断片しか知ることができない、膨大な人口全体ではなく、ほんの一部の人間の共同体しか知り得ないと、彼女を述べている。そこで、「…子供のよような語り手はその街を全体的に眺めているわけではない。彼は自分の環境を‘理解しやすく’しようとして、切り離された部分を見て、全体像へと一般化している」。従って、「こだまする緑」では、都会とも田舎とも取れるような背景の中で描かれているが、実のところ、「老人」と「少女と少年」を含む小さな共同体なのである。そうして、『無垢と経験の歌』では「都会のパノラマ」が描かれている訳ではない、何故なら、子供の眼を通して見た光景でしかないのである。続いて、マイケルはブレイクの田園的要素の使い方は独創的であると指摘している。その理由は以下の通りである。

田園的神話の世界と商業上の取引の世界の間にある窓を文字通り開けることによって、ブレイクは同時に都市と田舎の関係性を変容させている。

(マイケル, 47ページ)

田園的な作品は、ロンドンが都市として成長し、より多くの田舎の共有地が囲い込まれていったので、18世紀においてはますます誤解を与えるようになっていた。田園的なものに寄せる単純化された郷愁は、土地所有者と労働者の関係を誤魔化す幻想であった。ブレイクの『無垢と経験の歌』はそのような幻想に抗う働きを持っている。

…都会的な場で田園的なイメージをしばしば「囲い込むこと」³⁶によって、ブレイクはまた貧困と児童労働のような都会的特徴を「田園的な」背景に持ち込み、田舎と都会、富める者と貧しい者との障壁を打ち砕いているばかりか、オリバー・ゴールドスミス³⁷の理想化された田舎の貧しい者と、はるかに悪魔に取り憑かれた都会の貧しい者との間の障壁をも破壊している。

(マイケル, 48ページ)

マイケルは『経験の歌』の「昇天節」を、理想化された田園の土地に対する激しい風刺詩として分析している。その土地では「太陽が輝き」、「雨が降り」、そして「そこでは赤子は決して飢えることがない」。田園的な理想像と郷愁の繋がりを現在時制と未来時制を用いることで回避している点でブレイクはとりわけ独創的であると言える。つまり、「昇天節」で示唆されている潜

在的に「実り豊かな」土地は未来において可能なものであり、悔恨の過去へ単に委ねられているわけではない。そういう訳で、ブレイクの『無垢と経験の歌』は、その詩集における「都市空間の隣接性」は「都市の貧困層を可視化している」ので、「田園モードに対する批判」を体現していることになる（マイケル、51ページ）。

続いてマイケルは「小さな黒人少年」と「煙突掃除の少年」（『無垢の歌』）の分析に取り掛かっている。最初に、この黒人少年はアフリカにはいないかもしれない。つまり、当時のロンドンには2万人近くの黒人奴隷が存在していた³⁸。両少年とも外観は黒っぽく、その色合いは彼らの人間性を覆い隠しており、この二つの詩は、子羊の直喩と偽装の要素を伴って田園的な逃避の物語を提示している。

ブレイクの目には、黒人少年の肌の色は、白人の煙突掃除の少年を真っ黒にして覆っている煤と同じように表面的である一方で、両者の皮膚の色合いはその都会の墮落した認知能力の消し難い「印」（「ロンドン」に見られるように）となっている。両詩に描かれている視覚的な風景に加えて、その田園的な物語は、外在的な印による汚名から少年たちを解放しようとするが、皮肉なことに、田園的な楽園の形でのその自由は死後においてのみ達成可能なのである。

（マイケル、53ページ）

トム・ダクレの夢を解釈して、マイケルは「その夢の最後は偽りを述べている訳ではない、それは単に都会の場における田園的ヴィジョンの限界をはっきりさせている」、そしてその銅版画の最下位にあるデザインは、最終連の寒い朝ではなくその夢を描いている、と指摘している。「昇天節」（『無垢の歌』）もまた、都会の貧困層を、矛盾を際立たせるように可視化するために、田園的な要素を利用している。トムが「裸で白い」煙突掃除の少年たちを夢見るように、ある種の救済を受けている極貧の子供達は、毎年、この日1日だけは上品な人々には「清潔である」と見なされる姿をしている。そうして、「テムズ川が流れるように」、「ロンドンの街の花として」、「子羊の群として」、「強い風」を伴って、子供達は一群の田園的なイメージと共に到着するのである。「都市としてのロンドンそれ自身は、この田園的な侵入により曖昧となっている、あるいはむしろ変容しているのである」（マイケル、57ページ）。

しかしながら、マイケルは「昇天節」の中に田園的要素における2重の腐敗を見ている。まず、「田園的なイメージは教会、国家、貧救院という組織によって強要されたもの」であり、そのイメージは、都会の貧困に関する真実を明らかにするというよりは、隠蔽するための組織の思惑を反映している。次に、子供達が文字通り年長者や庇護者に対して立ち上がる時、彼らは田園的な要素をひっくり返しているのである。子供達の歌声は、撞着語法的な表現「調和に溢れた雷鳴のごとく」でそのコンテキストを圧倒するものとして描写されている。その銅版画のデザインは、蔦と蔓を通

してテキストを読むことが出来るように配され、それ自体が華やかな言語を通して見ることのメタファーとなっている。そこでは、「読者は、拡大解釈して、搾取せずあるいは客体化せずに、その都市の中に無垢を見いだせるかどうかが問われているのである」(マイケル, 60ページ)。

次にマイケルは『経験の歌』の詩の検討に移り、『4つのゾア』(80番目の図版, II, 9-20)からの引用で始め、「人間的抽象」では「ある者を貧困にしなければ、貧困は存在しない」のであるから、ブレイクはそのような慈善事業の存在そのものを批判している。2番目の「煙突掃除の少年」の中で、「子どもの両親は(そしてより大きな社会全体として示唆されているが)その子どもの役割を美化することで、恐ろしい状態を見えない」ようにしており、「昇天節」では慈善活動は、マイケルが慈善の対象となる子供達は「特別なやり方で謙遜さをまとうようにすべきである」(サラ・トリマー, マイケルの引用による, 61ページ)という現代の見解を引用して述べているように、「年長者に対する適切な行動や敬意を埋め込む手段」となっている。貧困の美化と異なることへの恐怖と苦難に繰り返し晒されることによる無感覚が一緒になって、結果として無関心を生み出している様をブレイクは明らかにしている。

「こだまする緑」や子羊の「野原」に見られる『無垢の歌』における開かれた空間が、『経験の歌』における「毒の木」「私の可愛いバラの木」「愛の庭」に見られるように囲いで閉じられた庭となっており、その全てにおいて、切り離された閉じられた空間が「常に、特権ではなく、破壊を付与している」(マイケル, 64ページ)。それぞれの庭は、隠された欲望の毒からであれ、「汝、行くなかれ」の警句が響く時に、行動に移せない欲望の腐敗からであれ、楽園の喪失の再現という物語の場であるエデンの園の一つである。

そこでマイケルは、転換点となる詩で過渡的な詩と見なしている「ロンドン」に目を向けている。田園的な要素は危険を孕んでいる、何故なら理想的な世界を提案することで、現実世界の欠陥を無視する一助となっているからである。

都会では、そのような選択的ヴィジョンは致命的である。何故なら、共同体の絆を断ち切ることが出来ないでいると、その絆に毒を吹き込むことになる。つまり、全ての市民は深く結ばれているのである、愛の絆でなければ、「心が造った鎖」と「弱さの印」によって。

(マイケル, 67ページ)

ブレイクが「それぞれの」街路、「すべての」人間の「すべての」叫び声を強調することで、その経験を一般化し、彼が出会う人々は個人ではなく、すべての人が同一の「特権化された」都会の経験を共有しているのである。さらに、動詞と名詞としての‘mark’の使用は、観察の行為と観察対象を一緒にすることで、その同一体験に語り手も取り込んでいる。後にブレイクは煙突掃除の少年や、兵士や売春婦に言及しているが、「…彼はまず判別し難い人々の顔の共通の特徴をはっきりさせている。換言すると、文法的な単数形を使用することで、逆説的に都会的な体

験を集合的なものにしてている」(マイケル, 72ページ)。このように、語り手は彼が見守っている悲惨さの本質的な一部となっており、彼が歩いている都市から自分自身を切り離せないでいる。このことは、語り手の意識の中に煙突掃除の少年、兵士、売春婦と幼児が入ってくるにつれて、マイケルの言うところの都会の「相互相関性」をより高めている。作品「ロンドン」は「都会のパノラマ」、つまり、無垢の子供にとっては断片的である都市の全体像を達成している点を指摘しているように思える。

もしすべての市民がその詩が描き出しているように結ばれているのであれば、その時にはまたその相互の関連性を破壊ではなく、相互のサポートのために利用できるという潜在的な可能性があることになる。その意味で、その詩が実にももの哀しく描いている緻密に編まれた社会的な網は、逆説的には救いの生地なのである。

(マイケル, 74ページ)

マイケルの著作の中でブレイクの詩における都市のイメージを『4つのゾア』、『ミルトン』、『ジェルサレム』について議論することで発展させている。彼の究極の論点は、「ともに語る」と同様に「ともに住む」を意味する動詞‘converse’の古く広い意味内容に基づいている。

1. To move about, have one's being, live, dwell
2. (a) To associate familiarly, consort, keep company: to hold intercourse, be familiar
(b) To hold sexual intercourse
(c) To hold commercial intercourse, deal, trade, traffic

(*Oxford English Dictionary*, quoted in Michael, p. 196)

マイケルはこの広範にわたる意味内容をブレイクの詩行「永遠界で人間が人間と話し合う時彼らは互いの／胸の中にはいる（それが歓喜の世界なのだ）／相互の交換のうちに」³⁹（『ジェルサレム』, 図版88, II. 3-5）当てはめて、「このようにジェルサレムの建設は、他のところでは「精神の戦い」として知られている相互の交換、つまり会話なのであり、人間が動き回り、ともに生きる会話の場なのである」と注解を添えている（マイケル, 196ページ）。最終的に、「会話」であるテキストは、それに「印をつける」想像力と都市のメタファーとなっている。

ブレイクの仕事は究極的には世界は想像力の働きを通して常に構築される過程にあることを示すことである。都市が「終わりなく変容していく」中で、その努力は多くの成功と失敗のモデルとなっている。

(マイケル, 198～9ページ)

ジェイムズ・チャンドラー

マイケルが『無垢と経験の歌』と『田園的な要素』の関係性に注目していたが、ジェイムズ・チャンドラーは「ブレイクと感傷の統語論：'ブレイクする'理解に関する論考」⁴⁰という論文の中、ブレイクの時代におけるもう一つの一般的な関心事であった「感傷」、あるいは「感傷的な」という言葉を題材として取り上げている。その題材は「教養ある中流階級文化」の当時流行の特徴であった。「国民的感傷」という表現はブレイクの時代にあっては目新しいものでもあった（すべてはチャンドラー、103～4ページからの引用）。

チャンドラーは感傷に関わる数人の理論家、特にルソー、ヒューム、アダム・スミスを含む理論家に言及している。そうして、彼らが「常に人間の心の人徳、特に自分自身のそれについて語り、他の人や、特に宗教的な人を非難するためにそうしている」とブレイクは攻撃していると述べている（チャンドラーによる引用は「理神論者へ」、『ジェルサレム』図版52）。ブレイクは、自然に関する「思索」を深めた「国民的な感傷」を、宗教を犠牲にして「自然」を偽りに満ちた形で持ち上げる試みと見なしていた。ブレイクによる他者への批判は共感の理論から派生している。人は他者が感じるように感じて共感するわけではなく、他者の「場」に立った場合に自分がどう感じるかを想像し、共感していると、スミスは主張していた。ブレイクは反発していた、何故ならひとつの「場」を想像するには必然的に範疇分けして一般化しなければならない。ブレイクにとっては「一般化することは愚か者のすることである」。

チャンドラーは「毒の木」（『経験の歌』）を論じて、その詩はふた通りの異なる読み方を提供し、一つは「怒りを抱き続けられないことの重要性に関する心温まる物語」であり、もう一つは、語り手が抑圧された怒りの果実の毒にあたって敵が地面に横たわっているのを見て「喜んでいる」という「悍ましい解釈」である。この詩はこのように「心を温めたり、凍らすように仕組まれて」おり、二つの情緒は「お互いに切り離すことができない」ものである（チャンドラー、108～9ページ）。1750年代以降、それぞれの著作の最後に本文とは別に、本文から抽出した道徳的な感傷の一覧表を添付するという流行が盛んになっていた。そして、1790年代と1800年代には、国民的感傷やユニオニスト（連合王国とアイルランドの統合を目指す一派）の感傷の一連の高まりがあり、特に一般的な民族主義者の著作や伝統的な歌にはそれが見受けられた。この種の「感傷的な」著作とは対照的に、ブレイクの詩には次のような点が見られるとチャンドラーは主張している。

…矛盾する感情が、感傷を分解して情熱と感覚にするように絡み合っている。ここでの「感覚」とは気持ちの機能としてばかりでなく、構造の機能として、従って、統語論の機能としてという意味で用いている。換言すると、ブレイクは感傷を作り直すために感覚と関わっている。

（チャンドラー、110ページ）

『トリスタン シャンディ』⁴¹から引用しつつ、チャンドラーは「代換法」⁴²という手法を原因と結果の逆転手法として解説している。『感傷旅行』においてスターンは移動することと移動されることの両者の意味で旅行という言葉を用いている。しかしながら、ブレイクの「精神の旅人」はいかなる「共感的な想像力」を超越して、「回転しながら相互の姿に変容しているという性格の範疇分けを超えた問題である」。従って、「ブレイクの詩は感傷を作り上げる一種の場所に関する想像力あふれる交換のための媒介ではない」。「精神の旅人」（登場人物がお互いに相手に変容しているように）における「言葉の交差」は、共感を抱くことから読者を遠ざける文法上の構造である（すべての引用はチャンドラー、112ページ）。

次にチャンドラーは「羊飼い」（『無垢の歌』）と「ああ、ひまわりよ」（『経験の歌』）における統語論上の曖昧性の分析へと進み、前者における原因と結果の関係が奇妙であることに着目している。つまり、羊飼いが「さ迷い」、それから羊のあとを追い、そしてその声に応えているが、本来はその逆順でなければならない。ここで次の2行に焦点を当てている。

だって、彼は子羊の無邪気な呼び声を聞き、
母羊のやさしい返事を聞くのだから。

(K2, 5, II. 5-6)

チャンドラーは、最初に‘call’と‘reply’を名詞として、そして、‘innocent’と‘tender’をそれぞれの名詞を修飾する形容詞として読むことで可能な読解を規定しているが、‘innocent’と‘tender’はそれぞれ‘Lambs’と‘ewes’を修飾しているという読み方も可能であると指摘している。つまり、羊飼いは‘innocent lambs’、あるいは‘innocent call’、そして‘tender ewes’、あるいは‘tender reply’を耳にしている可能性があり、あるいは最終的には‘ewes which tender (i.e. offer) a reply’（応えている母羊）の鳴き声を聞いている可能性がある。この最後の解釈の場合は、「すべての中で最も目を引くのは、‘tender’が‘reply’を修飾する感傷的な形容詞というよりは経済的な動詞となっている」点である。結果として、この詩は道徳的な‘裁断’という意味で、一つの感傷に安易に落とし込めることは出来ない」（チャンドラー、113ページ）。

チャンドラーは「ああ、ひまわりよ」の第二連に焦点を当てている。

そこで欲望にやつれた若者と
雪の経帷子を着た青白い処女が
墓から立ち上がり、憧れる、
私のひまわりが行きたいと望むところを。

(K2, 43, II. 5-8)

この詩の二つの関係副詞‘Where’は両方とも‘aspire’の影響下にある可能性があり、この詩を読み進めると、これらの‘Where’が一つの英文の最終節を示しているのか、もう一つの英文の最初の節に掛かっているのか不明であると指摘している。そして、それらがお互いに並列の関係にあるのか、あるいは一連の場所に関する言及なのか、また、それらを直線的に、あるいは円環的に解釈すべきなのかもはっきりしないと指摘している（チャンドラー、114ページ）。従って、最後の‘Where’は若者と処女が目指している場所かもしれないし、彼らが願いを抱いている場所かもしれない。次に、‘pined’という単語は、最初は動詞として読めるが、6行目を読むと、その読み方を修正せざるを得なくなり、‘pined’は6行目の‘shrouded’に合わせて分詞となる。何故なら、読み進むにつれて、‘Arise’は若者や処女に掛かる主たる動詞でなくてはならないからである。チャンドラーはまた‘put into pine’という意味で‘pined’に関する語呂合わせの例を指摘している、つまり、「棺に納められている」ことになる。このような複雑な統語論上の議論を通じて、次のようにまとめている。

車輪の中の車輪。この円環はこの詩の‘Where’構文を矮小化しており、同様にこの詩全体は「精神の旅人」を矮小化していることになる。つまり、その冒頭の連を反復して終わっており、その円環の繰り返しを示唆している。「彼女は彼を岩に釘付けし、そしてすべては私が述べたようになっている」。

(チャンドラー、114ページ)

チャンドラーは「羊飼いや」「ああ、ひまわりよ」のような詩作品の統語論的構造の中で感傷を排除することに専心することと、感傷や自然宗教に対するブレイクの敵意は完全に一貫していると信じている。次に、エドモンド・バーク⁴³の「実質的な表出」という理念を引用している。すべては「国民的な感傷」と「関心の共同体」を共有しており、従って、どのような政府が選挙で選ばれるかどうかは問題ではなく、ともかくその政府の行動はその国民の関心を表現しているとバークは主張していた。バークの理論は呪いのようなものであった。なぜなら、ある種の普遍的な「第二の自然」から行動を起こす人間性の概念を生み出していたからである。理神論者に対するブレイクの批判や彼の作品「自然宗教は存在しない」から分かるように、「感傷主義者」が提案していた、「自然」の一部である自然に関する人間的要素を付与する思索をブレイクは嫌悪していた。

ブレイクの目的は感傷の跡を示す慣習的な思索や交流のレベルを排除することであった。対照的に彼は自分の感傷的な産物の統語論的繋がりを心が造った鎖として捨てている、その繋ぎ目は人間が造った物なのだから造り直しが可能であり、人間によって創造されてきたシステムなので、「他の人間のシステム」による奴隷化を逃れてきた。

(チャンドラー、116ページ)

マイケルとチャンドラーの両者は、ブレイクの時代の文化的歴史から特定の題材を、それぞれ、田園の分野と感傷的な動向という題材を意図的に選択していた。どちらのケースでもその分析は、ブレイクを「歴史化する」ことに関心を持って始まっている。つまり、彼が生きていた時代と文化的な趣向の本質的な一部として、詩人を理解しようとする試みであった。驚くことではないが、実に興味深いことに、両者ともブレイクがその時代の文化的な趣向に批判的であった点で一致している。ブレイクには田園的な哀愁の痕跡はないし、マイケルの著作が明確に示しているように、ブレイクにはいかなる背景においても貧困の描写に手加減を加えたり、単純化したりする意図はなかった。同様に驚くことではないが、ブレイクには「感傷的な」動向の痕跡はなかったし、その教義と唱導者に対して嫌悪感を抱いていたとチャンドラーは結論付けている。結局、知的な人物に、例えば、ジョセフ・サーフェス⁴⁴の感傷をそのまま受け入れることを期待できないであろう。そうして、パークの「実質的な表出」が同一の批判的な対応を受けることを期待することになる。その時、ブレイクを「歴史化」することは、彼の独創性に対する賞賛の念を高めるという副作用をもたらしている。ブレイクには、彼の時代と生活の場を覆う厚い雲を通して見極める驚くべき能力があり、非凡であると同様に、かつ自立した、彼自身のヴィジョンを持っていた。

同時に、これらの二人の研究者が、ブレイクの『無垢と経験の歌』に関する幾つかの啓発的な分析を提供していることに注目したい。「毒の木」に「心温まる」物語を見出すことは出来ないのに、チャンドラーの分析の一つとはたまたま見解を異にするが、その一方で、例えば彼の論文の中で提案しているように「虎」や「蠅」に加えて、「人間の抽象」あるいは「乳母の歌」(『経験の歌』)などの他の幾つかの作品に彼のアプローチを用いることは有用であると考えている。同様に、マイケルの分析法に従い、『無垢と経験の歌』における典型的に「田園的な」イメージリーを抽出し、その様式を覆すためにブレイクが異なる手法を導入していることを学ぶことは啓発的であると思う。また、彼女が「ロンドン」をブレイクの「都会」の概念を展開する際に、ひとつの転機となる作品として位置付けていることは啓発的であると言える。

研究それ自体が、それが生み出される時代を反映して変化してゆく点に注目することは興味深い。例えば、D. H. ロレンス⁴⁵やバートランド・ラッセル⁴⁶の友人であり、同世代の人物であったミドルトン・マーレイは、「個性」によってブレイクのヴィジョンを解説している。そうして二つの世界大戦に挟まれた時期に流行していた話題である「自由恋愛」の概念を用いて、ブレイクの性に関する問題を論じている。

ブレイクは彼の妻以外の女性を愛していて、その愛人について妻に率直に語った。その結果は悲惨なものであった。互いのアイデンティティーを相互に認め合うという愛は、それ自体は完璧に正当化しようというブレイクの教義は、より素朴な妻の魂にとっては悪であった。

(マーレイ、45～6ページ)

マーレイの言葉を読んでいると、ポール・モレル⁴⁷が、ロレンスの『息子と恋人たち』における惚れ惚れするようなミリアム⁴⁸のような人物について講義している声が聞こえてくるようだ。マーレイは、これをブレイクの人生における大きな幻滅の一つであったとしている。カミラ・パグリアの性が、見る側にとってどのように見えたかに関する理念（「セクシャリティはその本質において輪郭の短縮形である」）や、あるいは女性の性器の醜さ（「女性の性器はいかなる審美的な基準においても美的ではない」）に関する理念は、結局彼女をはっきりと1990年代に位置付けることになるが、しかし、彼女のブレイクに関する著作はマーレイの著作と同様、価値あるものとして引き継がれていくだろう。

ネルソン・ヒルトンの「自己的に脱構築する」詩、つまり、社会的、文法的独裁、あるいは「鎖」を打ち砕く詩としての「ロンドン」の分析は、別の意味で啓発的である。彼は実際のテキスト、言語の「鎖」、そしてその効果に焦点を当てている。他の研究業績と同様に、その全てを必ずしも受け入れる必要はないが、彼の価値を認めつつヒルトンの著作を読む必要がある。そこで、「ロンドン」における語呂合わせや感覚的な破綻に関する分析に寄り添って読んで行くと、彼の分析の多くは、第3章における解説を脱構築的な用語で再提出していることに気づくことになる。その詩の言語学上の特徴は読者にとって「破壊的」、あるいは「解放的」な効果をもたらしていると言える。「人間は自分自身の看守として働いている」という言説の楽観的雰囲気には惹かれており、その詩の自らの鎖から解放する言語の中に、「自己の解放につながる鍵を見出している」。その一方で、「特許を与えられた」、「印」、「畏怖」、「幼児の」悲惨さに関する倍加された重みを忘れることはできない。それゆえに社会的、経済的な抑圧に対する怒りの詩であるという基本的な読みに戻ることになる。

興味深いことに、ジェニファー・ディヴィス・マイケルもまた「ロンドン」に対して楽観的なもう一つの読み方を見出している。彼女は都市とその住民に関する同時的に内包的で全体を見渡すヴィジョンとなりうるその詩の能力を指摘することで、その理解に多少異なる視点を加えてきた。そうしてジェイムズ・チャンドラーは数多くの他の読み方を開始し、そこではブレイクの統語論が2重の解釈を許容している。これまで見てきたように、批評はそれ自体がその生まれた時代を反映して変化している。マイケルとチャンドラーは両者共、「歴史化」という研究活動に参画し、ブレイクが生きていた時代の文化的な背景に彼らが選択したテキストを関係づけることに関心を抱いている。

しかし、他に多くの批評のプロジェクトが同時に立ち上げられ探求されている。歴史化の研究が進み、ヘレン・P・ブルーダーがブレイク研究におけるフェミニスト研究の役割を主張することでその立場を守ろうとしているのと同時に、他の研究計画も進められている。例えば、ジュリア・M・ライト⁴⁹は、ブレイクは結局、自分が反対してきた国家主義者と帝国主義者の比喩表現を採用せざるを得なくなったと主張し、ブレイクの最後の作品、『ジェルサレム』で、「彼自身の単一的で植民地化している国家を拡大するために宗教上と国民的な相違の抹消」について探求

を深めている。それゆえにライトは「深く宗教的で、想像力あふれる作品としての『ジェルサレム』に関する伝統的な回復」からは一線を画している。マーク・ラッシュェの論文「ブレイクと科学研究」は、「現代の科学はブレイクに関する新たな牽連性を見出している」ことを提案し、科学自体に対する反発というよりは、ニュートンの科学に対する詩人の有名な敵意は、実のところ彼の時代の進化・発展を続ける科学的なイデオロギーに対する批判であったと主張している。それどころか、有名な「砂の一粒に世界を見て、…」は新物理学の信奉者によって広く取り上げられている、その理由は「ブレイクの4行詩の詩的言語の内に、一般人と科学者が同様に想像可能なのであるが、相対性と量子に存在する奇抜さを求めていた」のである⁵⁰。結果として「ブレイクは現代の物理学理論の全体性の解明に関わる研究者にとっては、不思議に魅力的な人物として機能し続けている」とラッセイアは結論付けている（引用はラッセイア、206～7ページ）⁵¹。そこで、ある研究者はブレイクの詩を彼の時代のコンテキストに位置付けることに関心を向けている一方、彼を現在にしっかりと位置付けようとしている研究者もいる。どちらがもっとも成果を生む取り組みなのかは、読者自身が答えることになるだろう。

これまで検討してきたすべての研究者は実に刺激的である。そのすべての研究者はブレイクの側面と、読者が関連づけることができるブレイクの読書体験における要点に光を当てている。彼らは、「ああ、その通り、彼らの主張は理解出来る」と納得させる洞察力に富んだ論点を解説している。しかし、それらの主張には共通点がほとんどなく、彼らの訴える目的と方法論は非常に異なっている。本章では見出しうるブレイクに関する見解、認識法、議論に関する本来の多様性を十全に示すことはできなかった。次章では、研究資料を通して、これからのブレイク研究におけるテーマを追求し、それらを拡張する方法に関する多くの示唆を提供することになる。

- 1 2012年に出版された改訂版では本章は大幅な加筆・修正がなされている。特により最近の二人の研究者、Jennifer Davis MickelとJames Chandlerの業績に対する評価が追加されている。
- 2 Alexander Gilchrist, *Life of William Blake, "Pictor Ignotus"* (London: Macmillan, 1863) この著作はブレイクに関する最初の体系的な伝記であり、執筆当時、未だ存命中のブレイクを知る人々からの聞き取り調査の記録としても貴重である。
- 3 Edwin John Ellis & William Butler Yeats ed., *The Works of William Blake, Poetic, Symbolic, and Critical* (London: Quaritch, 1893) ブレイクの出身や生涯に関して事実に基づかない記述も含まれているので注意が必要。
- 4 Algernon Charles Swinburne, *William Blake: A Critical Essay* (London: 1868, new edition 1906)
- 5 John Sampson, *The Poetical Works of William Blake: a new and verbatim text from the manuscript engraved and letterpress originals* (Oxford: Oxford University Press, 1905)
- 6 Sir Geoffrey Keynes ed., *The Writings of William Blake*, 3 vols (London: Chiswick Press, 1925)
- 7 D. J. Sloss and J. P. R. Wallis, *William Blake's Prophetic Writings*, 2 vols (Oxford: Oxford University Press, 1926)
- 8 Joseph Wicksteed, *Blake's Vision of the Book of Job* (1910)
- 9 Mona Wilson, *The Life of William Blake* (London: Nonesuch, 1927)
- 10 S. Foster Damon, *William Blake: His Philosophy and Symbols* (1924)
- 11 それぞれの著名な研究者の業績に関してはネット上で公開されている。

- 12 この章は本編の第7章にあたる。
- 13 Northrop Frye, *Fearful Symmetry: A Study of William Blake* (Princeton: Princeton University Press, 1947)原注:Page references are to the paperback edition, Boston, Beacon Press, 1962.
- 14 *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, edited by Alex Preminger and T. V. F. Brogan, carries a passage on the idea of archetype of Northrop Frye: Frye has claimed that it is not important whether there is any relationship between literature and reality, nor whether literature embodies the truths of depth psychology. What is important is that literature, when taken as a whole, reveals inductively the persistence of certain patterns, with the result that literature is seen to form a highly organized universe of its own. (p. 97)
- 15 David V. Erdman, *Blake: Prophet Against Empire* (Princeton: Princeton University Press, 1954)原注: Page references are to the paperback edition, New York, Anchor Book, 1969.
- 16 Erin(the ancient name of Ireland)is the Western nation of the British Isles. It is separated from the other three nations of Britain by the Atlantic, just as America is separated from the other three continents.
Erin symbolizes Blake's belief in the holiness of the body and its instincts.(Usually he distinguishes Erin, his philosophy of love, from Ireland, the place.)From *A Blake Dictionary: The Ideas and Symbols of William Blake* (Providence, Rhode Island: Brown University Press, 1965), p. 128.
- 17 Daniel O'Connell(1775-1847):he was often referred to as The Liberator or The Emancipator and was an Irish political leader in the first half of the 19th century. He campaigned for Catholic emancipation-- including the right for Catholics to sit in the Westminster Parliament, denied for over 100 years-- and repeal of the Act of Union which combined Great Britain and Ireland. From Wikipedia: https://en.wikipedia.org/wiki/Daniel_O%27Connell
- 18 Richard Warner(1763-1857):who in 1804 startled Bath and London with the publication of a sermon, preached on the day of National Fast in support of the renewed war, declaring War Inconsistent with Christianity and urging Englishmen to refuse to bear arms even in case of an invasion by Napoleon. Erdman, pp. 476-477.
- 19 John Middleton Murry, *William Blake* (1933)
- 20 原注:Murry, *op. cit.*, p. 7. Page references are to the Life and Letters Series edition, Oxford and London, Jonathan Cape, 1936, and will appear in brackets thus: (Murry, p. *).
- 21 原注:From *The Eighteenth Century*, 21(1980), pp. 212-35. Page-references given in this chapter are to the essay as reprinted in *William Blake: Contemporary Critical Essays*, ed. David Punter, in the Macmillan New Casebooks series, Basingstoke and London, 1996. Page references are given in brackets thus: (Hilton, p. *).
- 22 John Locke, *Essay Concerning Human Understanding*(1689):この著作の中で展開された認識論では、人間の心はいわば白紙(tabula rasa)として生得観念(innate ideas)を有していない。観念の起源はあくまでも経験であり、人間のできることは経験を認識し、加工する能力だけである。この認識論に対してブレイクは激しい批判を加え、ブレイク独自の人間観を作品の中で展開している。
- 23 A figure of speech which yokes two seemingly contradictory elements. Oxymoron is thus a form of condensed paradox. Shakespeare has "O heavy lightness! Serious vanity! / Mis-shapen chaos of well-seeming forms! / Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health!"(*Romeo and Juliet* 1.1.178-80) *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* edited by Alex Preminger and T. V. F. Brogan (Princeton: Princeton University Press, 1993), p. 873.
- 24 原注:Edwards in his 'Mind-forg'd Manacles: A Contribution to the Discussion of Blake's "London"', *Literature and History*, 5(1979), 87-105; Bloom in his *Poetry and Repression: Revisionism from Blake to Stevens*, New Haven, CT, Yale University Press, 1976.
- 25 'chain of events'の日本語での訳例としては「一連の出来事」が一般的であるが、'chain'の第一義は'metal ring'であり、'restriction'の意味合いを含意している。一方、日本語の「連」は、「つづく、つづける:連休、連戦、

連載」,「つながる, つなげる。また, 手をつなぐ。協力する。連山, 連結, 連携, 連合。], なかま「常連, 奥様連, 学生連」などの人間的な繋がりを含意している(『明鏡国語辞典 第2版』)。従って, 拘束力を内包する'chain'からの解放を求めることはあるが, 「連」からは解消しか生まれない。

26 Camille Paglia, *Sexual Personae: Art and Decadence from Nefertiti to Emily Dickenson* (1990) 原注: New Haven, CT Yale University Press, 1990. Page references are given to the Penguin edition, London, 1992, and are given in brackets thus: (Paglia, p. *).

27 sadism: 1 enjoyment from watching or making somebody suffer
2 a need to hurt somebody in order to get sexual pleasure
from *Oxford Learner's Dictionary*

28 The Kessler syndrome(also called the Kessler effect, collisional cascading or ablation cascade), proposed by the NASA scientist Donald J. Kessler in 1978, is a scenario in which the density of objects in low earth orbit(LEO)is high enough that collisions between objects could cause a cascade where each collision generates space debris that increases the likelihood of further collisions. One implication is that the distribution of debris in orbit could render space activities and the use of satellites in specific orbital ranges infeasible for many generations.

From https://en.wikipedia.org/wiki/kessler_syndrome

29 ミルトンのな天国観: Heaven and its angels, the “Good,” are simply the unthanking orthodox. But Hell and its devils, the “Evil,” required revelation. The forces of Id are the fountain of life; its “devils” are the original thinkers, essentially revolutionists, who are always disturbing to orthodoxy. From *The Blake Dictionary*, p. 262.

30 Nefertiti: Neferneferuaten Nefertiti(c. 1370–c. 1330 BC)was an Egyptian queen and the Great Royal Wife(chief consort)of Akhenaten, an Egyptian Pharaoh. Nefertiti and her husband were known for a religious revolution, in which they worshiped one god only, Aten, or the sun disc.

From <https://en.wikipedia.org/wiki/Nefertiti>

31 Anne Kostelanetz Mellor is a Distinguished Professor of English Literature and Women's Studies at UCLA. She specializes in Romantic Literature, British cultural History, feminist theory, philosophy and gender studies. She is most known for a series of essays and books that introduced forgotten female Romantic writers into literary history, and she edited the first feminist essays on Romantic writers in 1988, entitled *Romanticism and Feminism*.

From https://en.wikipedia.org/wiki/Anne_K._Mellor

32 Marc Kaplan : On the other hand, feminist readings like those of Susan Fox and Anne K. Mellor have pointed out that Blake seems uneasy about any display of willfulness on the part of the female, and that he almost invariably portray such situations negatively, while simultaneously idealizing female-sacrifice as embodied in characters like Ahania and Oothoon. *Jerusalem* is no exception to this latter rule. “*Jerusalem and The Origins of Patriarchy*” from *An Illustrated Quarterly Blake*, Volume 30, Issue 3., page 68.

33 Helen P. Bruder wrote *Women Reading William Blake: Opposition is True Friendship*, and *William Blake And The Daughters of Albion* and edited *Queer Blake*, *Blake, Gender and Culture*, and *Sexy Blake* (2013).

34 この2行は 'For the Sexes The Gates of Paradise' からの引用である。その詩行を含む連を以下に掲載する。

I rent the Veil where the Dead dwell
When weary Man enters his Cave
He meets his Saviour in the Grave
Some find a Female Garment there
And some a Male, woven with care
Lest the Sexual Garments sweet
Should grow a devouring Winding sheet

35 Jennifer Davis Michael, *Blake and The City* (Lewisburg: Bucknell University, 2006) Here is a short excerpt from a book review written by Michael Ferber from *An Illustrated Quarterly Blake* (Volume 41

Issue 3), which is helpful in understanding the discussion in the text:

Michael's introduction canvasses Blake's uneasy place in the romantic canon, and distinguishes his view of nature from Wordsworth's. The contrast between natural and artificial, between rural and urban, is not found in Blake, she argues, because "all human environments are constructed, be they urban or rural, and the idea of a pristine nature does not even exist outside the human mind" (18) ... She does not distinguish between rural and wild, and so the unexceptionable claim that humans construct the rural environment leaks into the highly debatable claim that they construct nature.

原注: Jennifer Davis Michael, *Blake and the City*, Cranford, NJ, Bucknell University Press, 2006, p.46. Subsequent page references to this work will be given in brackets thus: (Michael, p. *).

- 36 囲い込み運動(Enclosure)は18世紀のイングランドにおいて、大規模農法の導入とともに、それまでの小規模の農地を統合し、それまでの共有地をも含めて柵で囲み、所有者の占有地とした動向のことである。その結果、多くの農民が土地を失い、都市労働者として産業革命に貢献する結果となったとの説もある。
- 37 Oliver Goldsmith(1728-1774): At Basire's, the boy met the artists and engravers and authors who were creating the great age of English book illustration. One day within a year or so of Blake's moving into Great Queen Street, Oliver Goldsmith, poet, novelist, literary man-of-all-work, and Professor of Ancient History at the newly founded Royal Academy, "walked into Basire's ... The boy-as afterwards the artist was fond of telling-mightily admired the great author's finely marked head as he gazed up at it, and thought to himself how much he should like to have such a head when he grew to be a man." G. E. Bentley, Jr., *The Stranger from Paradise: A Biography of William Blake* (New Haven and London: Yale University Press, 2001), 37.
- 38 Blake produced his most extended meditations on slavery in the period 1793-94, not only in *America*, but also in *Visions of the Daughters of Albion*, ... The first and most striking image of slavery in *Visions* comes in the very first line: "Enslav'd, the Daughters of Albion weep: a trembling lamentation / Upon their mountains; in their valleys, sighs towards America." Saree Makdisi, *William Blake and The Impossible History of The 1790s* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 2003), p. 92.
- 39 これらの詩行の翻訳は、梅津済美訳『ブレイク全著作』名古屋大学出版会、1989年、1326ページを参照。
- 40 James Chandler, 'Blake and the Syntax of Sentiment: An Essay on 'Blaking' Understanding' from *Blake, Nation and Empire*, edited by Steve Clark and David Worrall (Basingstroke and New York: Palgrave Macmillan, 2006), pp. 102-18. 原注: Subsequent page references to this work will be given in brackets thus: (Chandler, p. *).
- 41 原注: Laurence Sterne, *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, 1759-1770.
- 42 Hypallage: from a Greek word meaning 'exchange', a transference of epithet, as 'Sansfoy's dead dowry' for 'dead Sansfoy's dowry' (Spenser). From *The Oxford Companion to English Literature* edited by Paul Harvey, 4th edition (Oxford: The Clarendon Press, 1967). A modern example is as follows: "a mind is a terrible thing to waste" for "to waste a mind is a terrible thing".
- 43 Edmund Burke(1729-1797) was an Irish statesman born in Dublin, as well as an author, orator, political theorist, and philosopher who, after moving to London, served as a member of parliament (MP) for many years in the House of Commons with the Whig Party.
Burke criticized British treatment of the American colonies, including through its taxation policies. He also supported the American revolution, ... Burke is remembered for his support for Catholic emancipation, ... and for his later opposition to the French Revolution.
From https://en.wikipedia.org/wiki/Edmund_Burke
- 44 原注: The famously 'sentimental' hypocrite in Richard Brinsley Sheridan's play *The School for Scandal* (1777).
- 45 D. H. Lawrence(1885-1930): William Blake and D. H. Lawrence are close to the center of the modern radical imagination. They both speak for an ideal-of the integrity of the individual and of the unity of instinct and thought-that gains ready recognition among who are bent on nurturing humanistic values in

our increasingly mechanized and abstracting society. Margaret Storch, *Sons and Adversaries: Women in William Blake and D. H. Lawrence* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1990), p. 1.

46 Burtland Russel(1872-1970) was a British philosopher, logician, mathematician, historian, and social critic. In 1950, he was awarded a Noble Prize in Literature.

47 Paul Morel : D. H. Lawrence's *Sons and Lovers*, one of the first artistic works produced with an awareness of psychoanalysis, appears to be a classic Freudian text... The triadic oedipal patten emerges sharply from the action of the novel: in the development of the relationship between parents; in the conflict of the two sons, first William and then Paul, with the father; and in the emotional aridity of Paul's relationships with young women.

Margaret Storch, p. 98.

48 Miriam Leivers : In *Sons and Lovers*, Paul's sexual experiences with Miriam and Clara take him to a mystical level beyond physical contact with the individual woman,... Here sexual union is most truly a union with the fundamental forces of nature that reflects the mother-infant bond rather than an erotic encounter...

A major thematic interest uniting Blake and Lawrence is the body, sexuality, and the essential nature of Man and Woman.

Margaret Storch, p. 19.

49 Julia M. Wright: professor of the department of English, Dalhousie University, Halifax, NS. Her research topics are as follows: literary theory, Irish studies, Popular culture, Literature and ideas of the nation, Politics and literature, and European studies.

50 原注: Julia M. Wright, *Blake, Nationalism and the Politics of Alienation*, OH, University of Ohio Press, 2004, p. xxxiii.

51 原注: From *Palgrave Advances in William Blake Studies*, ed. Nicholas M. Williams, Basingstoke and New York, Palgrave Macmillan, 2006, pp. 186-208.

(みやまち せいいち 札幌学院大学人文学部教授 イギリス文学専攻)